

# わが思想と経済学

コルナイ・ヤーノシユ  
 聞き手 盛田 常夫

## 五六年動乱とマルクス主義の放棄

**盛田** 博士候補学位を授与された一カ月後に、歴史的な事件が勃発した。いわゆる「五六年動乱」はいまでは「人民蜂起」と改められました。その時、教授は何をしておられたのでしょうか。

**コルナイ** 十月二三日、後にナジ首相の共犯者として捕らえられたドナート・フェレンツから、ナジ政府を構成するので、その経済政策プログラムを作成してくれとの依頼を受けました。

のでしよう。

**コルナイ** 中央統計局の局長室です。ピーター・ジョルジュの。

**盛田** それはまたどうして。

**コルナイ** 家が近かったということもありましたが、口述筆記のためのタイプや秘書が使えたことや、電話連絡が容易にできたからです。そこで、二三日から二七日まで作業しました。

**盛田** 次第にブダペストの混乱が大きくなっていくわけですが、その政策プログラム策定作業はどうなつたのでしょうか。

**コルナイ** 止めました。事態が混乱へと展開し、経済政策プログラムを提案できるような状況を超えてしまったと感じたからです。つまり、蜂起が内戦へ転化してしまい、プログラムを作成することを諦めたのです。

**盛田** 二七日以後は、どちらの側にも積極的に参加されなかつた。

**コルナイ** 十一月四日のソ連の介入によって事態が鎮圧されるまで、何もしてませんでした。そして、この日を契機に自身身で決断しました。政治から一切、手を引こうと。

**盛田** それは具体的な行動として示されたのでしょうか。

**コルナイ** 古い共産党は「人民蜂起」によって消滅し、カーダールの新しい党が結成されました。党員の籍は自動的に消滅

**盛田** それを引き受けられた。

**コルナイ** はい。というのも、その夏に私のイニシアチブで、経済改革提案の作業グループが、改革提案をおこなったところがありました。その提案の多くは後の六八年改革で活かされることになるのですが、企業の自主性や利潤関心の保証、価格の一部自由化、計画化の過度な集権制の解体などが含まれていました。今からみればたいへんナイーブなものではありましたが、その後の経済改革論議に参加していった人々は、この改革提案やその思想を自らの改革提案のなかで利用していくことになりました。

**盛田** それで、政策プログラムの作業はどこでおこなわれた

したわけですか。今でもよく覚えていますが、十一月七日に偶然に地区の党委員長と通りで出会いました。その時、彼にたいして、もはや自分はマルクス主義者ではないと宣言したのです。この宣言は自分にたいする宣言でもあつたわけで、今でも鮮明な記憶があります。

**盛田** しかし、実際問題として、政治から手を切るとは簡単なことではなかった。いろいろな誘いがあつたのではないでしようか。

**コルナイ** ささまざまなグループから誘いがありました。新たに組織された共産党からは、後に首相になつたフォック・イエヌーがカーダール政府の経済政策作成作業へ加わるように要請してきました。また、ラーコーシ時代にブルジョア経済学者として無視されていたヴァルガ・イシュトヴァーンはカーダール政府のもとに置かれた専門家委員会の委員長になりましたが、その彼も同じような要請をおこないました。

**盛田** 政府の委員会には参加されたのでしょうか。

**コルナイ** いや、一切のものから手を引きました。カーダール政府に反対する非合法の組織からの誘いもありましたが、それからも一線を画しました。そして、研究者としての道を歩むことを固く決意したのです。

## 著書の出版とイデオロギー攻撃

盛田 マルクス主義を捨て、共産党にも政府にも協力しない  
 コルナイにたいして、いやがらせはなかったのでしょうか。

コルナイ それは五八年から始まりました。

盛田 確か博士候補論文が著書として出版されたのは五七年  
 ですね。その時には、特別な障害はなかったのでしょうか。

コルナイ 私の著書が出版されたのは、まったくの幸運としか  
 かいようがありません。もう一年遅かったら、出版されるこ  
 とはありませんでした。というのも、当時の党指導部は人民蜂  
 起の後の秩序回復に忙殺されており、ストライキの処理や反対  
 者の逮捕・監禁で手一杯でした。この年は本当に無慈悲なほど  
 の抑圧が続いた時期でしたが、一冊の本の出版にまで目を光ら  
 せている暇がなかったのです。

盛田 ところが、実際に出版された後に、激しい攻撃が加え  
 られた。それは五八年に始まった。

コルナイ 最初は新聞の一連の論評記事として始まった。今  
 でもその執筆者たちの名前を覚えていますが、彼らは「修正主  
 義」、「反マルクス主義」、「反革命のイデオロギー的準備」など  
 と書き立てました。経済大学の教科書のなかでも、反革命と反

マルクス主義の事例として、私の著書や論文が引用されまし  
 た。

盛田 それはイデオロギー的な攻撃だけで終わったのでし  
 ろうか。

コルナイ 攻撃の頂点は経済研究所長のフリッツシュエでした。  
 彼は「五六年の革命」前は私の論文を褒め上げ、賞与までくれ  
 た人物です。その彼が私も同席していた公開の政治講演会の場  
 で、私の言動はマルクス主義の裏切り行為と断罪したのです。  
 この時期にこのような評価を受けることは、生命の危機に曝さ  
 れることを意味していました。なぜなら、多くの人々が裏切り  
 を理由に監獄に入れられた時期でしたから。

盛田 それで、経済研究所から追放された。

コルナイ それについて、一切の公的なる理由が明示されな  
 った。しかし、修正主義、裏切りとみなされた著書、それから  
 党に入らず、世界観の転換を告げたことが大きな理由であった  
 ことは明らかでした。さらにいえば、親しい友人の多くが亡命  
 したり、監獄に入れられたり、処刑されたりしたことも、関係  
 があつたかもしれません。これらが一緒になって、アカデミー  
 経済研究所には好ましからぬ人物ということになったのだと思  
 います。

盛田 著書の英訳が、五九年にイギリスで出版されます。そ

れにはどのような経緯があつたのでしょうか。

コルナイ 私の知る限りでは、イギリスに亡命した人々が私  
 の著書のことをオックスフォード大学のジョン・ヒックス教授  
 に教え、教授が英訳出版を援助したのです。オックスフォード  
 大学から出版されました。

盛田 イギリスでの反響はどうだったのでしょうか。

コルナイ 「マンチェスター・ガーディアン」は一面を使つ  
 た論評記事を載せましたし、「ロンドン・タイムス」も大きな  
 記事でとりあげました。三〇ほどの論評が現われました。

盛田 そのことは逆にハンガリーでの教授の地位を危うくし  
 たのではないですか。

コルナイ 当時、すべてのことが不確実でした。修正主義、  
 裏切りの批判を加えられた人々は、次には職を失うはめになっ  
 ていましたから、毎日、翌日にはいったい何が起ころのか、ま  
 ったく予想することができませんでした。拘留されるのではな  
 いかと心配しましたし、実際に拘留される状況にはありまし  
 た。しかし、幸いにも、拘留されることも、監獄に入ることも  
 なかったわけです。

盛田 五八年に経済研究所を追放されて、繊維工業研究所に  
 移られるわけですが、これはどのような経緯でお入りになられ  
 たのでしょうか。

コルナイ 博士候補論文では、副題にもありますように、軽  
 工業の経験を基礎データとして利用しました。その時から軽工  
 業の企業とは人的なコネクションがありました。そのような関  
 係で、その善意の人々から職場を保証しようという申し出を  
 受けたのです。名目的には技術研究員のポストだったのです  
 が、実際には経済研究に従事することが許されました。

盛田 それを契機に、数理経済学への転進が始まった。  
 コルナイ いや、そうではありません。職場の変化とは直接  
 に関係ないのです。これは職場が変わる前に、いわば自らの理  
 論的な再形成と係わって、始まっていた。

五五年に経済研究所に入ってから、とくに五七―五八年にか  
 けて、いわばアメリカの大学院生が読むようなマクロ経済学、  
 ミクロ経済学、成長理論のような文献を、根を詰めて勉強した  
 のです。

盛田 数学も勉強された。

コルナイ すでに学校時代から数学には自信がありました。  
 ですから、数学の勉強と数学者との共同研究は、同時に進行  
 しました。つまり、あるテーマを数学的に処理しようとする場

合に、数学者の方がそれに必要な数学を教えるという具合に進んだわけです。

当時は、線形計画と行列計算を勉強しました。もっとも近い共同研究者はリプターク・タマーシユで、彼とは軽工業における利潤関心の数学的分析にかんする論文を書きました。ところが、その草稿が出来上がった時に、リプタークが反体制運動への参加を理由に逮捕されたのです。

盛田 それはいつのことでしょうか。

盛田 それはまだ経済研究所に籍があつた時のことでしょうか。

盛田 それはまだ経済研究所に籍があつた時のことでしょうか。今から振り返ってみて、二人の研究者が静かに数学的モデルを研究している時に、その一方が政治的行動を理由に逮捕されてしまったということだけが、思い出されます。したがって、この論文を共同で完成させることができず、また雑誌に載せることもできず、いわゆるタイプ刷りで、それも「コルナイ・ヤノシユと科学アカデミー数学研究所研究員」の署名でしか出せなかつたのです。逮捕されている人物の名前を出すわけにはいけません。

盛田 リプタークはどれほど拘禁されていたのですか。

盛田 「マルクス主義者でない」という宣言は、この時期の勉強にどのように関係しているのでしょうか。

コルナイ その宣言は政治的な宣言であると同時に、理論的な転換を意味するものでした。それによって、数学への転進と西側の現代経済学の吸収が同時に進行了わけです。この時期の私は、といつても時期を特定化するのはたいへん難しいのですが、新古典派経済学徒になつたといえます。新古典派経済学を学び、これを受け入れたのです。

盛田 この時期、つまり五八年から六〇年代半ばまでの時期に、リプタークとのもう一つの重要な論文がでます。これもやはり、新古典派の精神と手法で書かれた。

コルナイ 彼との第二の論文「二水準計画」も、『エコノメトリカ』に掲載されたわけですが、前の論文と同様に、新古典派の思考方法にもとづくものでした。効用関数があり、希少財の制約条件のもとに、目的関数を最適化するという意味で。

盛田 コルナイ教授にとつて、西側経済学界への足掛りができたことは、大きな収穫だつた。

コルナイ 裏切り者のレットテルが張られた時期でしたから、たんに西側の経済学を学ぶだけでなく、自分を再形成し、その新しい精神で研究しようと考えたわけでした。したがって、それ

コルナイ 一年です。彼が出所してから、われわれの論文を西側の経済学雑誌に送つたのです。『エコノメトリカ』\*がこれを受領し、六二年一月号に掲載されました。そのときは、もちろん二人の名前が載りました。

盛田 外国での出版について、検閲はなかつたのでしょうか。

コルナイ ハンガリーではラーコーシの時代を含め、書籍・論文の検閲制度はありませんでした。すべて編集者の自己裁量に任されており、いわば自主検閲だつたわけです。主要な編集者を含め、党が任命していたこともあり、それでとくに問題はなかつたのです。現在にいたるまで、このようなシステムをとつてきたのです。われわれの論文を西側に送る時も、誰の許可も得ることなく、ハンガリー国内から郵便で送りました。

\*数理・計量経済学の国際学会機関誌。

### 正統派数理経済学の研究

盛田 この時期の教授は、やはりオンザジョブ・トレニンで正統派経済学を学ばれたことになりましたね。

コルナイ 西側の大学院生のように、大学で教員から教わるというのではなく、家で机の前に座り、書物から修得しました。

からはマルクスや価値法則や政治経済学と係わりをもたず、西側の世界へ参入しようと考えたのです。つまり、西側の世界で生き、西側の世界で出版しよう。

盛田 数学手法も、そのための重要な用具だつたということでしょうか。

コルナイ こうした転換を決意した時点で、マルクス主義政治経済学の用語で自分を表現するのではなく、西側世界の言葉で表現しようと思つたわけです。そのためには、数学という共通言語は不可欠でした。

盛田 一例として、どのような数理経済学が大きな影響を与えたのでしょうか。

コルナイ 私に大きな影響を与えた著書は、ドーフマン・サムエルソン・ソローの『線形計画と経済分析』でした。これは数学的な手法としての線形計画と新古典派理論を連結したようなものでした。これを非常に丁寧に読みました。それによつて、線形計画手法と新古典派理論を学ぶと同時に、数学的手法でいかにして社会主義経済の問題が分析できるのかを考え始めました。

盛田 その試みが、リプタークとの共同研究になつていった。

コルナイ 最初の論文では、企業が利潤に関心を示すが、利

潤総量ではなく、利潤率に関心を示す場合に、企業行動にいかなる影響がみられるかを分析しようとした。数理経済学と新古典派理論を、社会主義経済に応用したものです。

盛田 六〇年代にはイデオロギー的な攻撃が弱まり、多くの社会主義国で数理経済学の研究が始まりました。ソ連ではネムチノフに代表される学派が、数学的なモデル分析を進めました。

コルナイ その通りです。ハンガリーについていえば、五六年十一月四日から五〇年代の終わりまで、締付けの時代が続きます。しかし、その後、自由化が始まり、平和に生活しようという空気が強くなり、政府もまた人々が専門の仕事に従事することで、満足するようになったといえます。私自身についていえば、六三年になってようやく、その自由化の恩恵を受けることができました。

### 初めての国際会議

盛田 六〇年代初頭の自由化は、教授の研究生活に、どのような影響を与えたのでしょうか。

コルナイ 最初の著書が英国で出版されて間もない一九六一年に、英国の大学から招聘の話が届きました。

コルナイ 東側からの最初の会長でした。

盛田 六三年の会議の様子をもう少しお話いただきたいのですが、その時はどのような報告をされたのでしょうか。

コルナイ 数理計画法の総括的な報告をおこないました。これ以前に、セクター・レベルの線形計画をおこなっており、それを綿工業にまで拡張してしました。ですから、この時の報告は、リブタークと共同で作成した「二水準計画」法についての要約という意味もありました。

盛田 会議の反応はどうだったのでしょうか。

コルナイ 素直に受け入れられました。東側にも同じような研究をしている者がいると。

盛田 ハンガリーでの受けとめ方はどうだったのでしょうか。

コルナイ ハンガリー科学アカデミーのなかで、以前の職場に戻そうという変化がおきました。しかし、実際には経済研究所ではなく、アカデミー・コンピュータ研究所へ移ることになつたのです。それから、私が「過度集権制」を書いたことを意識的に覆い隠すようにし、私が正しいとも、また私の思想をリビリスすべきだともいわなくなりました。つまり、私にたいする攻撃が止んだのです。

盛田 それは西側で名前が知られたからでしょうか。

コルナイ その通りです。これはその後、同じようなパタ

盛田 それが外国からの最初の招待状だった。

コルナイ そうです。それで、出国のためにパスポートを請求したのですが、許可されませんでした。それから、何度となく請求しました。

盛田 それで、結局いつ許可されたのでしょうか。

コルナイ 六三年です。その頃から自由化が感じられるようになり、ちょうどロンドンで数理経済学の国際会議があり、そこに招待されていました。

盛田 その時はスターリン主義的体制の批判者としてでなく、数理経済学者としてでしょうか。

コルナイ その通りです。西側世界へ初めて出国できた点でも、また西側経済学会へ出席できたという点でも、私の人生の大きな事件の一つでした。

盛田 どのような会議だったのでしょうか。

コルナイ 組織者は後にノーベル経済学賞（一九七五年）を獲得したクープマンズとフランス経済学者のマランボーでした。参加者にはそうそうたるメンバールがあり、一昨年にやはりノーベル経済学賞を受賞したフランスのアレヤ、マッケンジー、ラドナーなどもいました。この時の参加者のうち、六人が七人が後に計量経済学会の会長になりました。

盛田 コルナイ教授も、七八年に会長になりました。

コルナイ 西側の大学が何度も招聘するようになって、ハンガリーの大学名誉教授の称号が与えられ、西側のアカデミー会員に推薦された後何年か経ってハンガリーの科学アカデミー会員に推薦されるということになります。

ロンドン経済大学で最初に教えたのが六四年ですが、それから四年たつてハンガリーのマルクス経済大学の名誉教授になりました。七二年にはアメリカのアカデミー会員になりました。が、ハンガリーのアカデミー会員になったのは七六年でした。いつも西側が先で、一定のタイムラグをおいて、ハンガリーがそれに続くのです。

### コンピュータの限界

盛田 教授にとつて、数理計画法を研究することの意義は、何だったのでしょうか。

コルナイ 非常にイデオロギー的な抑圧が強い時代にあつて、これは人が何かを表現する言葉だったのです。研究に利用する方程式や公式は、一つの中立的な言語を意味しました。私はけつして反マルクス主義的な議論を展開したり、マルクスを批判し始めたのではなく、マルクスの用語から離れるようにしただけなのです。数理経済学はこの可能性を与えてくれました。

盛田 これはいわば消極的な理由で、もつと積極的な理由もあつた。

コルナイ もちろんです。いま一つの私にとつての意義は、数学を使ってより精確に表現することによって、計画化の水準を向上させることができるかどうか、実験してみたかったので。当時の私はまだ、計画化そのものに問題があるというよりは、計画の方法がプリミティブなのだという確信がありました。したがって、計画が効率的になるように、より精確な計算が可能かということ調べてみたいという気持ちがありました。

盛田 その結果、どうも否定的な結論がでてきた。

コルナイ そう、これは駄目だと。

盛田 その結論に達したのは、いつでしょう。

コルナイ 一九六八年頃です。

盛田 その頃に、『意思決定の数理計画化』という論文集を出版されていますね。

コルナイ そのなかに、コンピュータピア（コンピュータによる理想社会）に見切りをつけている章があります。コンピュータピアを主張する人々は、手法がプリミティブだから、中央計画に問題が生じるのであって、これはコンピュータによって解決できると考えるわけです。しかし、私はそこで、その思考

が正しくないことを明らかにしています。それから、数理計画の研究を止めることになりました。

盛田 しかし、他の社会主義諸国ではコンピュータピアの期待が、その後から強くなっている。

コルナイ 多くの人々が何年も線形計画に従事し、計画当局のために数値計算をしてきたわけですが、私はこの領域に見切りをつけ、撤退したのです。

盛田 それはどういう確信にもとづいていたのでしょうか。

コルナイ 社会主義の経済問題は、コンピュータや数理計画法で解決できるような性質のものではなく、所有関係と刺激誘因に問題があるという確信をもつようになったのです。その意味で、五七―五八年の私の思考に戻ったともいえます。

盛田 明らかに、ソ連の数理経済学とは異なる立場を形成されたわけですね。

コルナイ ソ連の数理経済学を代表するネムチノフ、カントロヴィッチ（一九七五年ノーベル経済学賞）、それから中央数理経済研究所のフェドレンコなどのソ連学派とは、本質的に違います。

盛田 その違いを端的に表現していただきたい。

コルナイ 一つの違いは、ソ連学派はマルクス主義政治経済学の用語と線形計画法とを婚姻させた表現法に努めたことで

す。つまり、線形計画で計算される「影の価格」が、マルクスのいう価値とほぼ等しいことを証明しようとしたわけです。

ソ連学派はいわばコンピュータを使って、良いマルクス主義者になれることを証明しようとしたわけです。私はそれと正反對のことをしようとしたのです。つまり、マルクス主義から遠ざかるために、線形計画法を追求したのです。そうすることに よって、自らの思想の再形成をおこなおうとしました。私の教え子たちはすべてこのことを理解しています。これが一つの違いです。

### 正統派経済学批判への道

盛田 コルナイ教授とソ連の数理学派とのあいだには、もう一つの大きな違いがある。

コルナイ 彼らは数学的手法で、よりましな価格体系を計算したり、計画計算ができると確信しています。後にはそれが、最適システムの議論にまで進んでいきました。社会的に最適な経済システムが構築できるという論文や研究が、多く現われました。

しかし、私は経済システムの最適化など考えたこともありません。計画の最適化すら、早々と諦めてしまったのです。ある

程度までは計画化を改善することはできても、一定以上は無理だと諦めてしまったのです。

盛田 うまくいかないポイントはどこにあるのでしょうか。

コルナイ 計画化のプロセスでは、計画者の方は計画課題交渉の余地を残すように虚偽のデータを提示し、他方、計画課題を与えられる方は、生産能力を過少に申告して、計算間違いをおこさせるようにします。これはいわば相互の利害の争いで、計画化には付き物です。

ところが、ゴルバチョフが登場するまで、ソ連学派は最適計画法理論にしがみついたままだったわけです。実際に、カントロヴィッチ学派は八五年まで最適化計画の議論を続けていました。私の方は、もう六〇年後半に見切りをつけ、別の領域へと転進しました。

盛田 数理計画法に見切りをつけると同時に、新古典派数理経済学の批判をおこなっておられる。

コルナイ そうです。いわば二度めの離婚を経験した男のようなものです。一度目は、マルクス主義と結婚して、それに失望した。二度目は、新古典派理論と結婚して、再び失望した。しかし、三度目の結婚は止めて、独身で通したといえます。

盛田 三度目は自らの道を開かれるわけですが、新古典派（正統派）数理経済学の批判を思いたれたた原点はどこにあつ

たのでしょいか。

コルナイ 私が問題にしたのは六〇年代の理論ですが、そのなかに何か不毛なものを感じとりました。前提が非現実的で、結論がまことにつまらないのです。とくに私のような、社会主義国で何をすべきかを考えているような人間には、とりわけ不毛な理論のように思えたのです。社会主義国には別の制度システムがあり、別の環境のもとで、別の経済主体が活動しているわけですから、社会主義経済はミクロ理論の説明とまったく合わないと感じたわけです。

盛田 新古典派の均衡理論そのものにも、重大な欠陥がある」と批判されていますが。

コルナイ それが第二の批判点です。新古典派理論はそのすべての知的関心を、均衡状態に注いでいます。つまり、需要と供給が一致する状態に関心があるわけです。ところが、われわれが住んでいる世界には、需給の一致などないのです。ですから、新古典派の理論では、現実を叙述することも、説明することもできない。価格が均衡価格でないから、不均衡だという説明では満足できません。社会主義の企業は価格などに注意していないわけですから。一時的な超過需要や超過供給があるという問題ではなく、恒常的な不均衡が存在することに着目したのです。

です。しかし、マルクス主義的な思考を残してきたともいええます。そして、六〇年代の終わりには新古典派と手を切ることが大切だと感じたわけです。その時の思考、つまり人間の行動が社会的な諸関係の産物だと考える思考は、明らかにマルクス主義の影響だと思えますし、実際に現在の思考にマルクス主義的な要素が残っているとも感じます。

盛田 マルクス主義の社会哲学は今も、教授に思考の基礎にあるということでしょう。

コルナイ マルクスの価値論は完全に捨てましたが、思考方法の多くの要素が基礎になっていることは否定できません。最初に制度学派に近いという議論をしましたが、それはマルクス主義に近いということでもあります。ただ、新古典派理論から大きな影響を受けています。

盛田 それは具体的にどのような点でしょうか。

コルナイ 後になって私が重要な概念として利用している「ソフトな予算制約」という概念がそうです。「予算制約」そのものは、新古典派経済学の概念です。つまり、経済主体は極大化行動をとるわけですが、そこには制約条件が存在する。したがって、極大化を表現する曲線（無差別曲線）と制約線との交点が極大点になります。この思考は新古典派そのものです。新古典派は予算制約をハードなものと考えていますが、社会主

盛田 逆にいえば、社会主義経済には、慢性的「不足」という不均衡状態が、あたかも独特な均衡状態であるかのように存在している。

コルナイ その知的なパズルを解くには、新古典派理論はいかに狭いと感じたわけです。

盛田 新古典派の哲学そのものにも、重大な欠陥があると考えられた。

コルナイ 論理的かつ哲学的なものです。効用関数そのものに、トートロジーを感じました。人々の選好がどのように形成されるかについて、何も答えないわけです。確かにいったん選好関係が与えられれば、それで多くのことを説明できるのですが、選好そのものが社会的産物なわけです。その理解が新古典派理論に欠けている。

#### 『反均衡の経済学』執筆へ

盛田 その議論はマルクス主義哲学の発想とよく似ています。教授の思考のなかにマルクス主義の影響が深く残っていると考えてよいのでしょうか。

コルナイ 五六年に政治的・イデオロギー的理由で、マルクス主義を拒否しました。当時はそのことが大切だと感じたわけ

義の企業ではこれが「ソフト」になることに注目したわけです。

盛田 この点は後の『不足の経済学』で詳しくお話したいதாகとして、そうすると教授の研究にはさまざまな経済学の潮流が影響を与えていることになりました。

コルナイ 折衷主義という批判があるかもしれませんが、折衷主義とは多くの視角を混同することです。人々は一つだけでなく、多くの思想に影響されるのがふつうです。私の場合も、マルクス主義や新古典派経済学だけでなく、ケインズやシュンペーターなどからも大きな影響を受けました。

盛田 実際に、新古典派批判の著である『反均衡の経済学』（原題『反均衡』）を書き始められたのは、いつでしょう。

コルナイ 六七年です。数理計画法から撤退しようと考えてからです。当時、経済研究所に連続セミナーがあり、そこで講演しました。およそ一五〇頁程度の短いものでした。ちょうどその頃、一般均衡論の代表者であったアロー（一九七二年ノーベル経済学賞受賞）から彼の研究所への招聘が届いたので。それで、六八年に半年アメリカで過ごしました。

盛田 そこで、スタンフォード大学の研究所へ行かれた。アローの均衡理論を批判した草稿をお渡しになった。

コルナイ 実は、恐る恐る手渡したのです。招待いただいたその人に、その人の仕事を批判する草稿を渡したわけですか

ら。ところが、アローはそれを読み、最大限の賛辞を贈ってくれたのです。これは忘れることのできない瞬間でした。一人の偉大な学者とは何かと、批判意見にたいしてどのような態度をとるべきかについて、多くを教えてくれました。

盛田 アローからは何かコメントをいただいたのでしようか。

コルナイ いや、そのままの形で出版しなさいと。鋭い均衡理論の批判は有用であり、批判の刺激を与えることが大切なことから、けっして批判を緩めてはいけなないとアドヴァイスされたのです。

### 『反均衡』のアイディア

盛田 それで、一般均衡理論の批判の書は、すぐに出版されたのでしようか。

コルナイ いや、ブダペストに戻り、推敲を重ね、草稿を拡張しました。そして、七〇年に再びイェール大学から招聘を受けたのです。

盛田 どなたが招聘者だったのでしょうか。

コルナイ イェール大学の数学研究所から、コールズ基金で招待を受けました。当時、クープマンズがそこにいました。ま

ようか。

コルナイ それは西側への旅行と東側での生活体験から生まれたものです。資本主義世界では単純に市場均衡があるとはいえない。売り手は常に販売を考え、宣伝し、買い手を獲得するのに懸命になっています。ところが、東側の国へ行くと、今度は買い手の方が頭を下げて、商品を買わうわけです。つまり、一方の経済では買い手が売り手にたいして優位に立っており、他方の経済では売り手が買い手にたいして優位に立っているのです。ここに非対称性をみたわけです。

盛田 不均衡の非対称性をこれまでの経済学は分析していない。さ。

コルナイ はい、ワルラス型の思考は対称性の思考方法をとっています。一方に力がたまっていれば、他方にも同じような力があると考えます。その例が、超過需要と超過供給の対称性です。

盛田 「圧力」(プッシュ)、「吸引」(プル)の発想は、どこから生まれたのでしょうか。

コルナイ これは金属工業の技師から得たものです。金属工業では垂直的な生産ラインで鋼塊―平鋼―薄板がつくられてますが、この生産能力を測定する場合に、後にくる工程の能力が前にくるそれよりも大きくなるようにしなければなりません。

た、その基金は、トーピン(一九八一年ノーベル経済学賞)やデブリュー(一九八三年ノーベル経済学賞)の著書の出版をおこなっていました。

盛田 クープマンズは『反均衡』の草稿について、どのような考えをもたれたのでしょうか。

コルナイ 出版が実現するようにたいへんな援助をいただきました。文章上の表現のアドヴァイスでも助けていただきました。アロー、クープマンズという新古典派を代表する両巨頭から、彼らを批判する著書の出版を勧められたことは、終生忘れることができないう出来事です。

盛田 デブリューはどうだったのでしょうか。

コルナイ デブリューのセミナーにも出席し、そこで報告しました。デブリューからも、賛辞を受けました。そういうわけで、一般均衡理論の批判をおこなった『反均衡』は新古典派の指導者たちから一目おいてもらえるものでした。その反批判にやっきになったのは、新古典派の小物たちだけでした。

盛田 『反均衡』が出版されて、新古典派との最終決別が宣言されるわけですが、『反均衡』のアイディアについて、少し議論してみたいのです。市場における「吸引」(プル)と「圧力」(プッシュ)の概念が、不均衡を説明する重要な要素になっていますが、これはどのようなヒントから生まれたものでしょうか。

まり、後にくる工程が前の工程の材料を吸い込むことになる。

それが逆になると、鋼塊が平鋼を押し出すことになる。

このような話を技師から聞いて、それで「圧力」と「吸引」の命名を思いついたわけです。命名の由来はともかく、私が叙述したかったことは、西側の市場では人々が物を買うように圧力がかかっており、けっして均衡状態などにはないということでした。と同時に、東側の市場では物が常に市場から吸引されており、物不足が恒常的に再生産されるという不均衡状態が存在するのです。この非対称性を「プッシュ」と「プル」で表現したわけです。

### 急成長政策の批判

盛田 『反均衡』を出版された後、すぐに『急成長対調和的成長』という著書が出版されます。これはどういう経緯で出版されたのでしょうか。

コルナイ 七一年に書いたものですが、これはティンバーゲン(第一回ノーベル経済学賞受賞、一九六九年)に呼ばれて、オランダのロッテルダム大学で講演したものでした。講演者の一連の記録が書物として出版される仕組みになっていました。

盛田 著書のテーマは何だったのでしょうか。

**コルナイ** この時期、ハンガリーだけでなく、東ヨーロッパ諸国で再び急成長政策が展開され始め、みかけ上の成長率は高いが、経済構造上の歪みをひどくする方向に向かっています。そこで、たんに社会主義経済の特徴を叙述するだけでなく、理想的な成長パターンを示そうとしたのです。この時期の私の研究で、モデル提示のような規範的な分析をしたものは、これ以外にありません。

**盛田** その著書では、たしか経済政策的な提言をなさっていらっしゃる。それは政府の委員会の依頼に応じられてのことでしょうか。

**コルナイ** いや、そのような事実はありません。ただ、たとえていえば、当時のハンガリーはエレガントな上着を着ているが、ポロポロのズボンに素足という、バランスを欠いた状態だと感じていました。均斉のとれない産業構造があり、誤った産業優先政策が展開されていると考えていました。

**盛田** その立場から、急成長政策を批判された。

**コルナイ** そこで一番強調しなかったことは、スターリン主義的な成長パターンの批判でした。これを「強制成長」とか「ラッシュ成長」と名づけています。「ラッシュ・アワー」と同じで、急ごうと思うと、道が塞がってしまうわけです。

この点は日本のような国にとっても、けっして興味のない問題

**盛田** カンフル剤が必要なのではなく、精神安定剤が必要だと。

**コルナイ** 調和的で安定した成長が必要で、このことは七一年の段階で、累積債務の危険への注意を促すものでした。当時はまだ、債務の問題はなかったわけですが、今から振り返ってみますと、この著書はゆっくりとした成長を提言したものでした。ハンガリーにも、「急がば回れ」という諺があるのです。

### 政府への協力拒否

**盛田** やや時代が前後しますが、六八年からハンガリーは新しい経済システムへ移行しました。多くの経済学者が改革のための議論を重ねましたが、その時に教授は改革作成過程へ参加されたのでしょうか。

題ではないと思います。日本について知っていることは少ないのですが、急速な経済成長のあいだに環境破壊が進み、交通手段のようなインフラは進んでいるのに、住宅建設が遅れるという問題があると思います。これにたいして、私は調和的發展を主張したのでした。

**盛田** それは『反均衡』のアイディアとどのように関連しているのでしょうか。

**コルナイ** 『反均衡』と関連しているだけでなく、次の著作である『不足の経済学』とも関連しています。ヒルシュマンとストリーテンに代表される成長理論で、「非均斉成長」の理論があります。これは不均斉成長の利点を強調するものです。あるセクターに不足があれば、それを軸にして刺激を与え、経済全体を引き上げればよいと。

**盛田** 教授はその政策が社会主義経済には適用できないと主張されるわけですね。

**コルナイ** 何百年も眠っているようなラテン・アメリカの諸国には、そのような不均斉を利用して、経済を動かす道もあるでしょう。ところが、眠っているのではなく、十分なほどに走り込んできた社会主義の諸国（ソ連、中国を含め）にとっても、これは使えません。眠れないで困っている人に、ブラックコーヒーを飲ませる必要がないのと同じです。

**コルナイ** いや、私は参加していません。要請はありましたが、断りました。それは五六年の宣言にもとづくものです。あれ以来、政府の顧問になったこともなければ、政府にたいして反対のアジテーションをしたこともありません。しかし、政府や党に協力はしてこなかった。これが一つの理由です。いま一つは、ハンガリーで展開されていることが、見せかけのものではないことは明らかだったことです。システムの土台に触れないで、システムをうまく機能させることはできないのです。

しかし、私はいつも経済改革の「ファン」でした。外国で話す時には、いつも改革にたいするシンパシーを表明していました。それでも、システムが改革されるか否かについて、常に懐疑的でした。

**盛田** 当時の経済改革政策を、どのようにご覧になっていた

# アメリカ 経済白書

第731号  
1990

『90アメリカ経済白書』は、レーガン政権の「成功」のうえに立つて新たな経済を構築するというトーンで書かれている。アメリカ経済の行く方、今後の日米関係、日米構造会議の結末、さらには円の将来などを占い、90年代の世界経済を見通すための必読の書。

- A5変型判
- 定価2700円(税込)
- 好評発売中/

日本評論社



コルナイ 多くの点で、系統性を欠いていました。すべての観点からみて、調和的な改革パッケージだといえなかった。つまり、一方の手で生産を需要に適合させる市場経済を実現しようとしながら、もう一方の手で大投資を進め、成長率を上げようとしていました。成長政策と市場志向の改革には、大きな矛盾があつたと思います。

盛田 それでも、政府の改革委員会には参加されなかった。

コルナイ 改革に反対する論文も書いていません。しかし、共産党が権力を独占し、国家所有が支配的で、官僚主義的な中央管理が残っているところで、市場経済は構築できないと考えていました。とても両立不能だと感じていました。

盛田 一切の政府活動には加わらないという頑なな決意は、いったいどのように保持されてきたのでしょうか。

コルナイ たしかに、五七年には政府への協力を拒否した多くの友人は、六八年には協力を再開しました。しかし、私はそれをしなかった。その理由の一つは、回を重ねてきた旅行にあります。

盛田 六三年の英国旅行以後の。

コルナイ その時から、自分の時間の四分の一、三分の一、あるいは半分を西側で過ごすことが多くなりました。半分はハ

ンガリーに住み、半分は亡命者のように生きてきたわけです。その時から、ある意味で自分をヨーロッパ世界の一員として考え、西側の人間としてみなすようにしました。偏狭な地方主義から解放されることに努力しました。そして、西側文化とハンガリーとのあいだを仲介することが、自分の使命だと感じるようになったのです。

盛田 国際的な舞台が自分の持ち場だと。

コルナイ 西側の研究者にたいして、何が問題なのかを分かってさせることができました。同時に、非社会主義的な思考、価値体系、哲学、科学の手法・倫理等々をハンガリーに移植することに努めました。それは国際的な学界の場でもそのように振舞いました。計量経済学会の会長に選ばれた時（七八年）には、ハンガリー、ポーランド、ソ連、ブルガリア、チェコスロバキアから研究者を招聘するように努めました。また、ヨーロッパ経済学会の会長に選ばれた時（八七年）には、西側と東側の研究者の交流に努力しました。

盛田 しかし、西側へ亡命することはなかった。

コルナイ 亡命したいとは思いませんでしたし、これからもあります。ハンガリー国籍を捨てようと思ったこともありません。しかし、一方の足でハンガリーに、もう一方の足で西側世界に生きてきたのです。